

ふるさと農道緊急整備事業有間農道改良工事に伴う

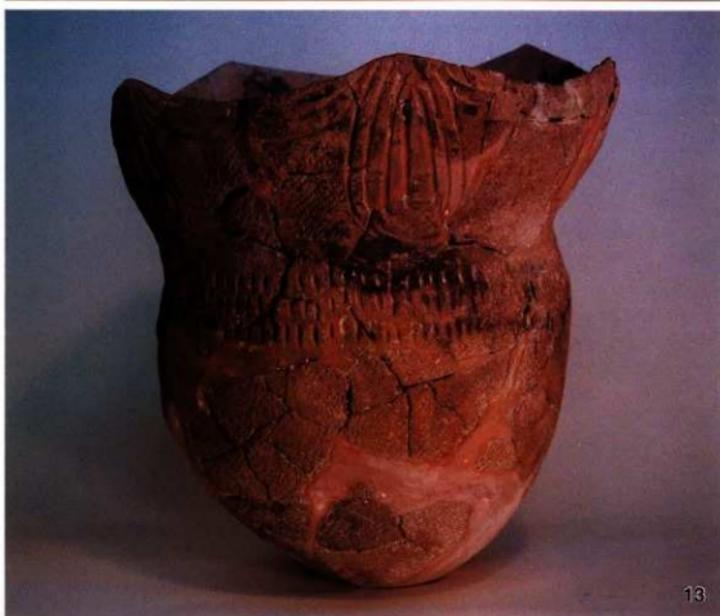
上ヶ谷遺跡発掘調査報告書

1 9 9 8

斐川町教育委員会



13 着色前



13 着色後

序 文

島根県東部の宍道湖西岸に所在いたします斐川町では、島根県の玄関口ともなる出雲空港を抱えております。この交通便利な立地を生かし、近年、町東部ではゴルフ場などの観光開発、また、町西部では、企業誘致に伴う工業団地の造成や流通の効率化をはかるための道路の新設・改良などの開発が急激に進んでおります。

しかし、その一方で私達の先人が残された貴重な文化遺産が、確実に破壊される危機に瀕しているのも事実であります。

開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数も比例して増加しておりますが、私たちは、このような文化財を守り、後世に伝えていかなければなりません。

この発掘調査によって得られる「現代に至る発展の過程」を皆様にご理解いただき、私たちのまち斐川町の過去の姿に思いをはせていただければ、幸いと存じます。

末筆ではございますが、この調査にご指導・ご協力・ご理解を頂きました皆様に対して、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも文化財行政にお一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年3月

斐川町教育委員会
教育長 村上家次

例　　言

1. 本書は、ふるさと農道緊急整備事業有間農道改良工事に伴う上ヶ谷遺跡発掘調査報告書である。

2. 調査は、斐川町建設課の依頼を受け、斐川町教育委員会が約500m²を対象に実施した。

3. 調査は平成8年5月15日より着手し、同8月4日に終了した。

4. 調査地は下記のとおり。

島根県簸川郡簸川町大字神水1654-1番地外

5. 調査組織は下記のとおり。

事務局　富岡俊夫（斐川町教育委員会文化課　課長）・昌子裕江（同　係長）・梅　由喜子（同　職員）

調査員　四方田三己（斐川町教育委員会文化課　主事）・松本堅吾（同）

遺物整理　錦田充子（斐川町教育委員会文化課　嘱託）・内田久美子（同　職員）・青木由美（同）・大田晴美（同）

6. 調査の実施にあたっては、宍道年弘・陰山真樹（以上：斐川町教育委員会　文化課）・錦織猛雄（斐川町　建設課）・足立真理子・伊藤トヨ子・遠藤繁雄・陰山慶子・陰山トミエ・陰山律雄・陰山百合子・梶谷松代・加藤秋子・黒田哲子・佐藤倭和子・高橋重雄・野津大吉・樋野行雄・樋野喜久・持田邦雄諸氏らの協力を得た。

また、泉　拓良氏（奈良大学　教授）・宍道正年氏（島根県埋蔵文化財調査センター長）・足立克己氏（島根県埋蔵文化財調査センター）・角田徳幸氏（同）・深田　浩氏（同）・野坂俊之氏（湖陵町教育委員会）・伊藤瑞章氏（斐川鉱業株式会社）からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

7. 本調査にあたっては、斐川町建設課をはじめ、用地周辺住民の方々には、多大なご迷惑をおかけする一方、格別なるご協力・ご配慮も賜った。ここに、記して感謝の意を表する次第である。

8. 出土木製品の樹種鑑定にあたっては、（財）元興寺文化財研究所に依頼し、協力を得た。

9. 編集・執筆・遺物実測・トレースは松本が行なった。

10. 繩文土器の復元作業は主に大田が行なった。

凡 例

1. 図中の方位は基本的に座標北をあらわしている。ただし、図版 PL. 2 ~ 4 は磁北を表している。
2. 本文および図版中の示したレベル高は、すべて T.P.+ 値 (m) であるが T.P.+ は省略している。
3. 遺物番号は挿図・遺物実測図版と写真図版で統一している。
4. 文化財一覧表と PL. 1 の番号は一致させた。
5. 遺構の名称は、下記のとおりアルファベットの組み合わせによって表しているが、一部適当な呼称が見当たらないものは、そのまま日本語の名称によって呼称している遺構もある。また、遺構番号は 2 衔を原則として 1 衔の数字には前に 0 を付している。

SB 建物 SD 溝 Pit 柱穴 SX 性格不明遺構

6. 本書で使用した土壤色は、小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準土色帖』1988 を用いて命名しているが、本文中は色相・明度・彩度の数値を省略している。
7. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、縄文土器・土師器-白抜き、須恵器-黒塗りのように塗り分けた（縄文土器・土師器が同じ表示であることに、大意はない）。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

| | |
|--------------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第Ⅱ章 位置と環境 | 2 |
| 第Ⅲ章 調査の成果 | 4 |
| 第1節 層位と遺物の出土状況 | 4 |
| 第2節 遺構 | 4 |
| 第3節 出土遺物 | 5 |
| 第Ⅳ章 まとめ | 9 |
| 第Ⅴ章 上ヶ谷遺跡出土縄文土器の復元 | 10 |
| 文化財一覧表 | 12 |
| 報告書抄録 | 卷末 |

挿 図 目 次

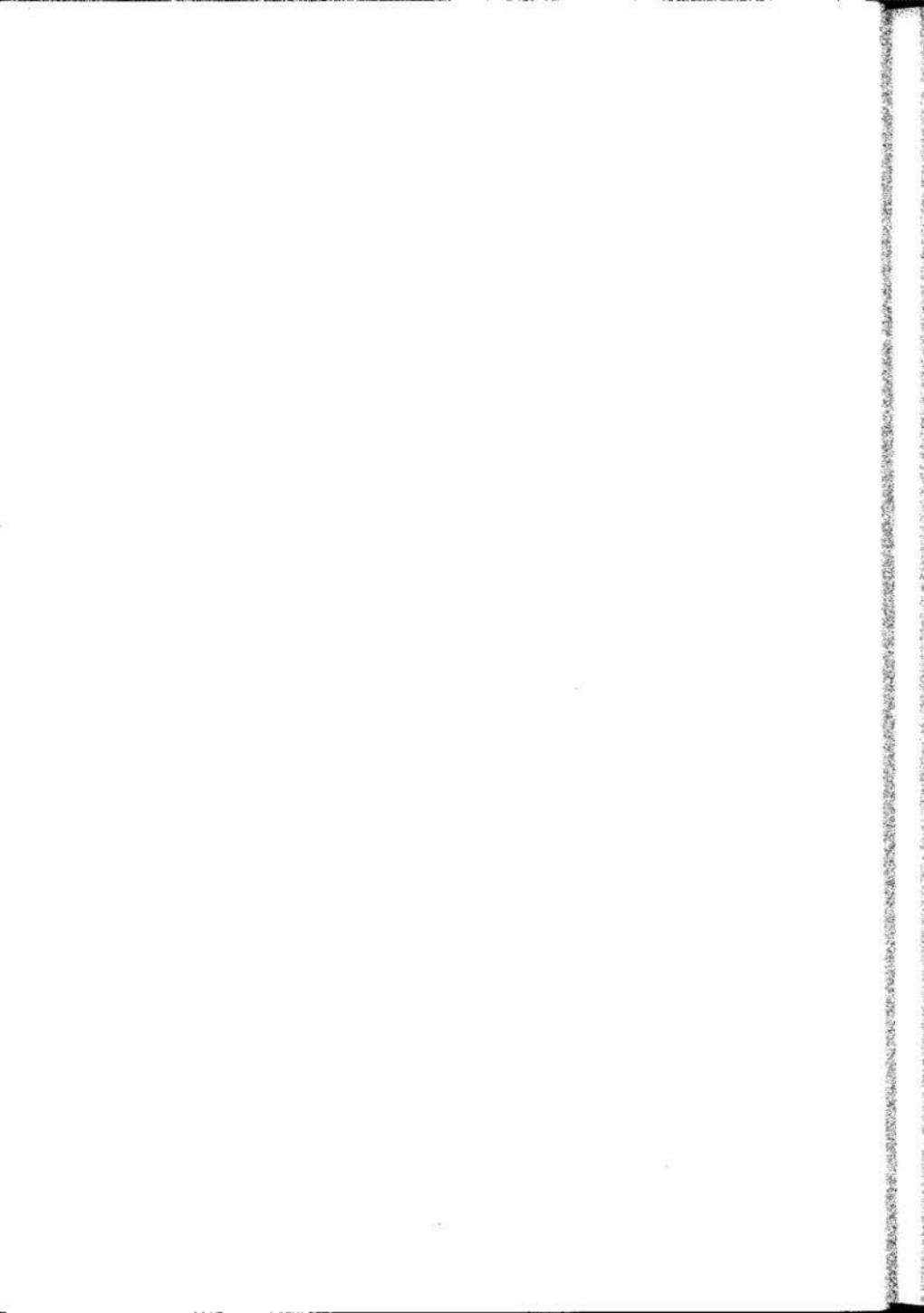
| | | |
|-----|-----------------|---|
| 第1図 | 上ヶ谷遺跡位置図 | 1 |
| 第2図 | 上ヶ谷遺跡調査区位置図 | 3 |
| 第3図 | 上ヶ谷遺跡出土の縄文土器 | 6 |
| 第4図 | 上ヶ谷遺跡出土の土師器・須恵器 | 7 |

卷頭カラー写真目次

卷頭カラー 上ヶ谷遺跡出土の縄文土器

図 版 目 次

| | |
|--------|-------------------|
| PL. 1 | 斐川町の文化財 |
| PL. 2 | 上ヶ谷遺跡調査区平面図 |
| PL. 3 | 上ヶ谷遺跡遺構平面図及び断面図 |
| PL. 4 | 上ヶ谷遺跡調査区断面図 |
| PL. 5 | 上ヶ谷遺跡出土の土器① |
| PL. 6 | 上ヶ谷遺跡出土の土器② |
| PL. 7 | 上ヶ谷遺跡出土の石器① |
| PL. 8 | 上ヶ谷遺跡出土の石器② |
| PL. 9 | 上ヶ谷遺跡出土の木器 |
| PL. 10 | 上ヶ谷遺跡調査区 |
| PL. 11 | 上ヶ谷遺跡調査区SB01・土層断面 |
| PL. 12 | 上ヶ谷遺跡遺物出土状況 |
| PL. 13 | 上ヶ谷遺跡出土の土器① |
| PL. 14 | 上ヶ谷遺跡出土の土器② |
| PL. 15 | 上ヶ谷遺跡出土の土器③ |
| PL. 16 | 上ヶ谷遺跡出土の石器 |
| PL. 17 | 上ヶ谷遺跡出土の石器及び木器 |



第Ⅰ章 調査に至る経緯

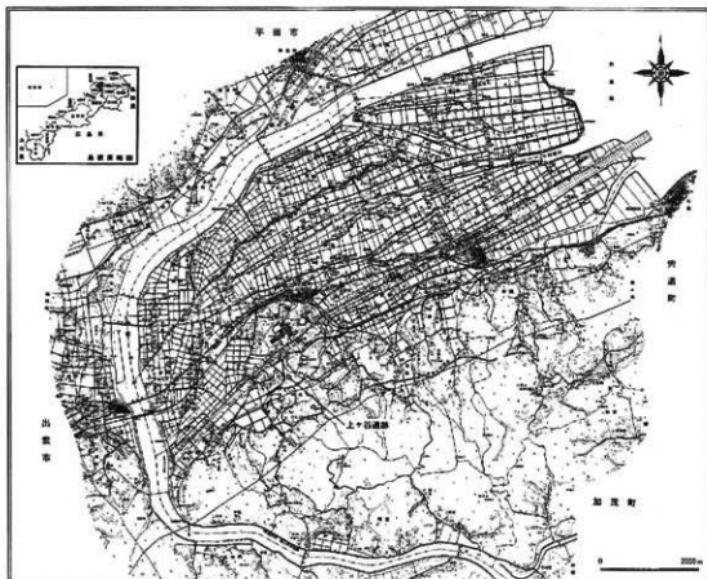
県下の町村の中では、比較的大きな人口規模をもつ斐川町は、恵まれた立地条件を生かして産業の振興を図るために企業誘致を推進し、近年ではハイテク産業の大手企業の進出が著しい。これに伴い工業団地の造成や幹線道路へのアプローチ道路の新設、既存道路の拡幅など、交通網の整備も急務となってきた。

そのようななか、斐川南工業団地から国道9号線へのスムーズなアプローチができるように、ふるさと農道緊急整備事業で有間農道改良工事が計画された。

着工に先立ち、斐川町長より斐川町教育委員会教育長宛に埋蔵文化財の有無を確認する分布調査の依頼が提出され、関係機関と協議した結果、教育委員会は平成8年5月に道路新設部分について試掘調査を実施することとした。

調査の結果、縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺物が確認された。また、遺構としては、埋土に遺物を含む谷地形と古墳時代後期から奈良時代頃のピット、溝状造構などが検出されたことにより遺跡の存在が認められた。

のことから、道路敷地500m²全面についての本調査（発掘調査）が必要であるとの結論に至り、引き続き文化財保護法第57条の6（遺跡発見届）を通知し、本調査に移行した。それと同時に、遺跡名を字名からとて、上ヶ谷（あげだに）遺跡と命名した。平成9年度は報告書作成のための整理作業が行われ、本書の刊行に至っている。



第1図 上ヶ谷遺跡位置図

第Ⅱ章 位置と環境（第1・2図、PL. 1）

出雲は神話の国として知られているが、その中心で「出雲の原郷」といわれる斐川町は、島根県東部の宍道湖西岸に立地する。

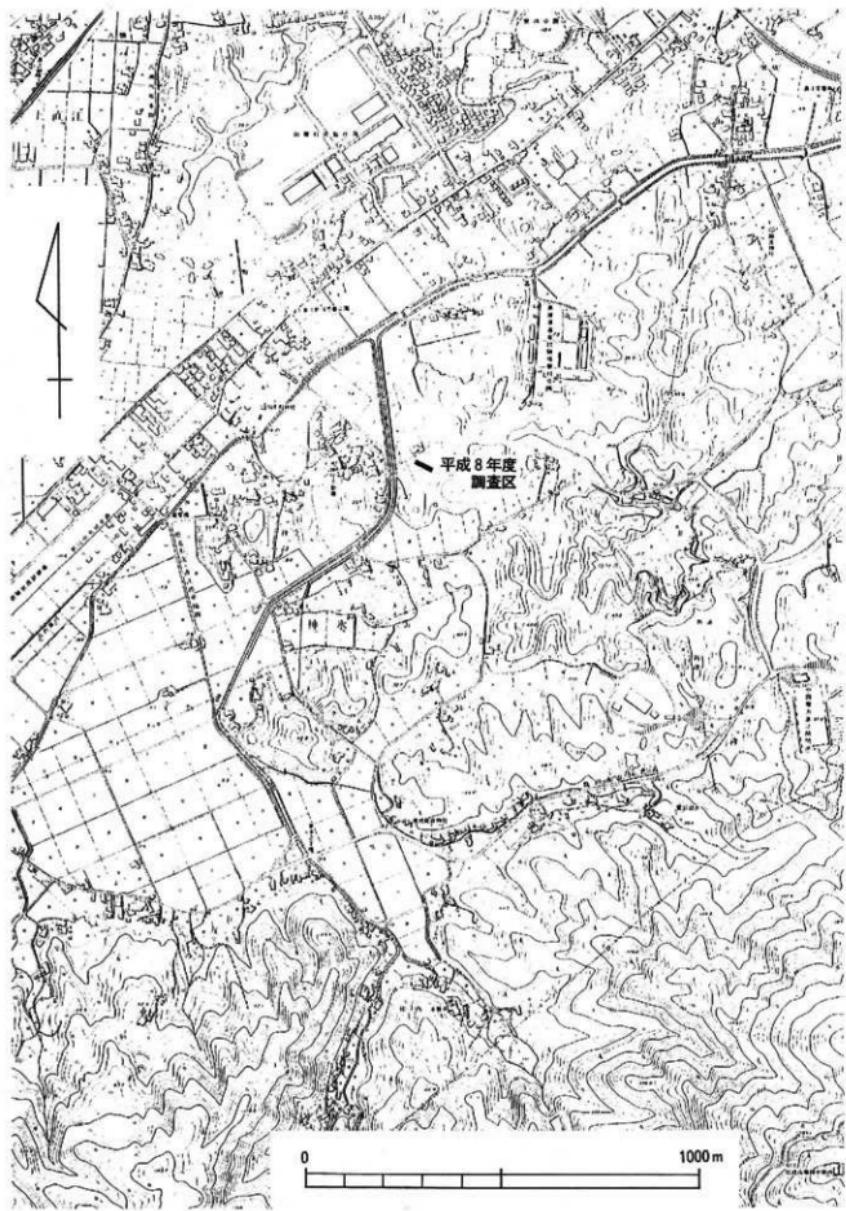
島根県の穀倉地帯である斐川平野は、古代からたびたび氾濫をおこす暴れ川で出雲大川ともいわれる斐伊川が上流から運ぶ土砂の堆積によって形成された沖積地である。また、この平野に建つ家屋敷の西側と北側には「築地松（ついじまつ）」とよばれる防風林があり、独特の田園風景がひろがっている。

斐川町全体を地形的に概観すると、北側は第1級河川の斐伊川によって形成された沖積地が展開し町面積の約50%を占める。南側の残り約50%については標高366mの仏経山（神名火山）を中心とする山地を含め、山地から派生する低丘陵によって構成されている。

遺跡の分布をみてみると、北側の沖積地にはほとんど確認されておらず、その大半が南側の山地や低丘陵地帯あるいは低丘陵に開まれた谷部に集中している。主要な遺跡として昭和59年に358本の銅劍、翌年の昭和60年には6個の銅鐸と16本の銅矛が、それぞれ出土した神庭荒神谷遺跡（国史跡）、全長48m以上の前方後円墳である神庭岩船山古墳（県指定文化財）や直径32m、高さ5mの円墳である小丸子山古墳（町指定文化財）、現在は直径30m、高さ3mの円墳で、もともとは前方後円墳であったと考えられている車原古墳などの古墳時代中期の古墳、奈良時代頃の出雲郡衙と推定される後谷遺跡、仏経山から連なる山々の一つである高瀬山には、中世頃に出雲で勢力をふるっていた尼子氏の家臣で、出雲十旗の一つに数えられる米原氏の居城の高瀬城がある。これらの遺跡はすべて南部の山地や低丘陵地帯に立地する。

当該遺跡周辺の遺跡では、東方400mに位置し、2基以上の古墳が確認された神水三メ田古墳群、西に約500mのところで円墳2基が存在する神守古墳群、南側約500mの位置には、円墳2基と方墳3基が確認された神水古墳群と、土器の散布地として周知された神守II遺跡などがあり、調査区周辺に古代の人々の生活の痕跡がうかがえる。また、調査区北側の丘陵上には、筑紫街道が東西にのびており、平安時代に菅原道貞が九州に下るときに通ったという伝承や、遺跡の西約100mのところに今も現存する不動堂の前を大名が馬に乗ったまま通ったら落馬したので道を南側につけかえたという言い伝えが残っている。

当調査区は低丘陵に開まれた谷部で新建川の右岸に立地する標高6~7mの低湿地であり、現況は水田が営まれている。地元の人はこの遺跡周辺を「あげだん」と呼んでいるが、これは字名の上ヶ谷（あげだに）が訛ったものと思われる。



第2図 上ヶ谷遺跡調査区位置図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 層位と遺物の出土状況 (PL. 3・4・11・12)

今回の調査範囲での層位は全体的に東西両端で検出された谷地形の影響を受けていたため、調査区全体にひろがりをみせる単純な堆積の平均的な層序といえる層は確認されなかった。しかし、地山が高まりをみせる調査区中央部のごく一部では、盛り土を除去すると、層厚が8~20cmで1mm大の明赤褐色のブロック土が混入した明赤褐色混じり灰褐色シルト、その下に、層厚10~28cmの炭を微量含んだ赤褐色まじり灰褐色シルト、層厚が8~36cmで1mm大の白色粒と炭を少量含んだ黒褐色シルトの二つの層を介在して地山に至る。これらは決して基本層序といえるものではないが、谷地形の影響が最も少ない部分であるため、標準に近い層序といえるかもしれない。

遺構検出は中央部の地表から約1m下で露呈する、にぶい橙色粘質上の地山上面で試みた。この地山は調査区両端に向て傾きをみせる。そのため、谷地形の中心部により近い調査区端では、かなり落ち込むために残念ながら安定した地山を確認することができなかった。

遺物は東側谷地形埋土である8層の有機物を多量に含んだ極暗赤褐色シルト層より縄文時代中期末のものと思われる土器が、11層の有機物を多量に含む、にぶい黄褐色シルト層より縄文時代中期初頭頃の土器がそれぞれ出土した。また、西側谷地形埋土である43層の粘性が強い褐灰色粘質上層より、奈良・平安期頃の須恵器が確認され、40層の密度が低い黒褐色粘質十層より、古墳時代後期頃の土師器・須恵器が検出された。

第2節 遺構 (第2・3図、PL. 2・3・10・11)

大部分の低湿地調査で見られる大量の湧水によって、遺構検出作業は困難を極めたが、調査区の中央部で総柱建物が1棟、溝が2条と調査区の両端にかかる谷地形などを確認することができた。

SB01は梁行2間、桁行2間以上の総柱建物である。柱間は1.6mで、柱筋は、ほぼN-12°-Wを示す。調査範囲外に展開するため、桁行は2間以上としかいえないが、北方向にのびることはないことを確認した。そのため、もし2間以上になるとすれば東方向にひろがる可能性が考えられる。

SD01は幅24~60cm、深さは最深部で14cmを測る。また、途中で2木に枝分かれし、その分歧点付近でSB01のPit01が検出された。切り合ひ関係としては、Pit01がSD01の埋土に切り込んでいるため、SB01の方が新しいと思われる。

SD02は幅18~30cm、深さは最深部で約10cmを測る。埋土は上から、褐灰色粘質土と褐色粘質土の二つの層で構成されている。埋土中より須恵器の細片が出土した。

SX01はプランが長径110cm、短径80cmの不定型を呈し、深さは最深部で16cmを測る。また、埋土中より出土した須恵器の壺の口縁部は、SD02の埋土中で検出されたものと接合することができた。それゆえ、同時期に存在したものと思われ、SD02のつづきとも考えられる。

調査区の両端で検出された谷地形は双方ともに調査区外へひろがるために、幅、深さを確認するこ

とができなかった。東側谷地形の埋土は全般的に砂っぽく、水分・有機物を多く含む。また、この埋土から縄文時代中期頃に位置づけされる上器や石錘、砥石などの石製品が出土した。西側谷地形の埋土も同様に水分・有機物を多く含むが、土壤はどちらかといえば、粘土に近い。この埋土からは、古墳時代後期以降の土器や磨製石斧、砥石などの石製品、田下駄などの木製品が出土した。

第3節 出土遺物（第3・4図、巻頭カラー、PL. 5~9・13~17）

遺物としては、調査区全体で縄文土器・土師器・須恵器・石錘・磨製石斧・砥石・田下駄などが確認された。

1~13は縄文土器である。すべて、東側の谷地形埋土より出土した。

1~5は同一個体の可能性が強く、キャリバー状口縁の深鉢と思われる。口縁部周辺や胴部に低い貼り付けの痕跡を有し、その上に爪形文が施されている。やや肥厚する口縁端部は平らで、ここにも爪形文を有する。端部内面には爪形文の下に1cm程度の縄文帯を付している。型式的には、岡山県里木貝塚の船元I式B類に酷似し縄文時代中期初頭に位置づけされるものと考えられる⁶。東側谷地形埋土である11層より出土した。

6~8は平口縁の深鉢の口縁部と思われる。

6は外側と平坦な口縁端部にも縄文が施され、内面には横方向の条痕がわずかに残る。口縁端部付近の内側には指頭圧痕を有する。内面は、にぶい黄褐色、外側は黒色を呈し、胎土は密で1mm以下の砂粒を多量に含む。東側谷地形埋土の8層より出土した。

7は外側が縄文、内面は条痕がそれぞれ施され、口縁部は屈曲し外反する。口縁端部はほぼ平らで色調は内面が、にぶい橙色、外側は灰褐色を呈する。胎土は粗く、1mm以下の砂粒と雲母を多量に含む。東側谷地形埋土である8層より出土した。

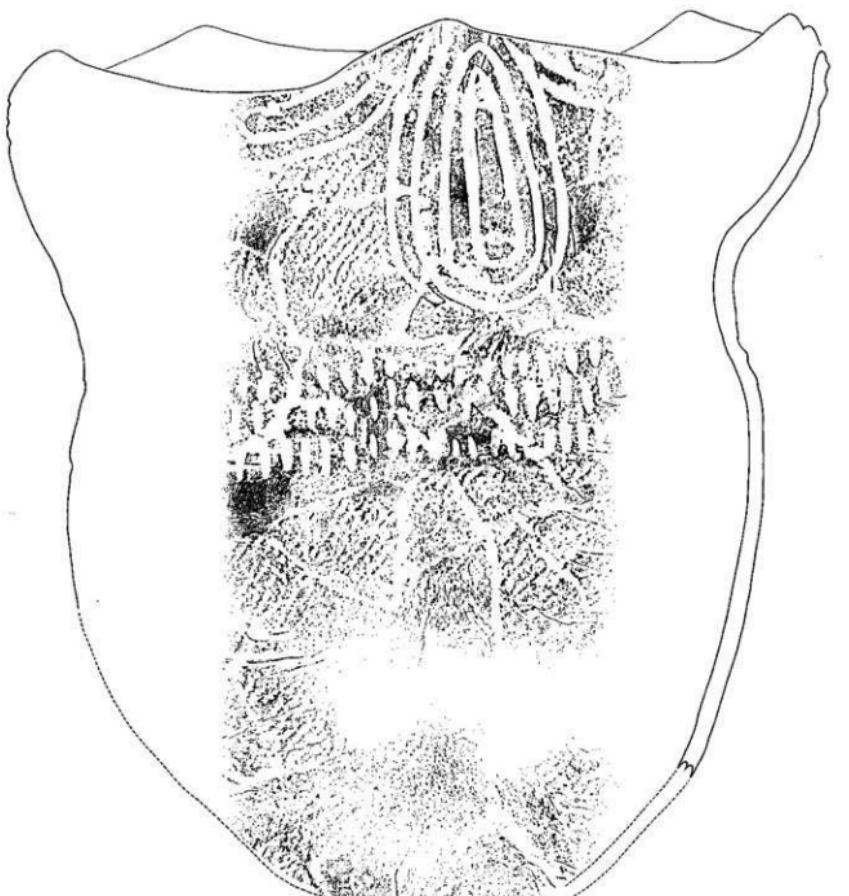
8は内外面ともに横方向の条痕が施され、外側の一部と内面に指頭圧痕をもつ。内面は暗褐色で外側は黒色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒を多量に含み、そのなかには雲母も含まれている。東側谷地形埋土である第11層より出土した。

9も恐らく平口縁の深鉢の口縁部と思われる。内面のみに横方向の条痕が施され、口縁端部は平らでやや肥厚する。内外面とも黒色で、胎土には1mm以下の砂粒と雲母を多量に含む。9と10は色調や地文、胎土から判断して同一個体である可能性が強い。9・10ともに東側谷地形埋土である11層より出土した。

11は器種が判然としないが、恐らくは深鉢の胴部と思われ、外側のみに縄文が施されている。色調は内外面ともに明褐灰色で、胎土には2mm以下の砂粒を多量に含み、雲母もわずかに認められる。東側谷地形埋土の8層より出土した。

12は深鉢の底部と思われ、平底で底部端まで縄文が施されている。色調は内面が黒褐色、外側が、にぶい橙色で、胎土は粗く、3mm程度のレキを含む。東側谷地形埋土の8層下層より出土した。

13はキャリバー形口縁の深鉢である。縄文地でキャリバー状になった口縁部の波頂部下に紡錘状の沈線文を施し、胴部上半には縦方向に3段の一見すると刺突文に見えるが、施文の方法から、しいて



13

0 10cm

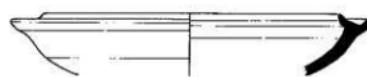
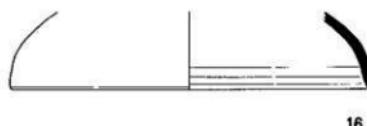
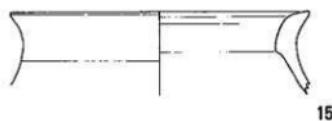
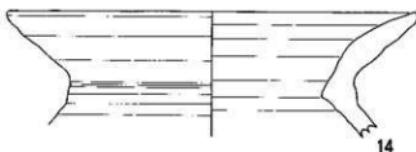
第3図 上ヶ谷遺跡出土の縄文土器

いえば短直線文ともいえる文様を有する。また、口縁部の沈線で囲んだ内側と頸部から胸部上半の文様が施された周辺まで、磨消の痕跡が認められる。色調は内外面とともに、にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗く、2mm以下砂粒を多量に含む。縄文時代中期末頃のものと考えられ⁸、東側谷地形埋土上の8層より出土した。

14・15は土師器の壺である。

14は復元口径16.8cmを測る。口縁部は端部に向かって外反し、口縁端部は丸い。色調は内面が、にぶい橙色、外面は黒色を呈している。胎土はやや粗く、1mm以下砂粒を多量に含む。西側谷地形埋土の40層より出土した。

15は口縁部が短くて厚い。また、口縁端部へ外反しながらのび、端部は尖り気味である。色調は内外面ともに黒褐色で、胎土には1mm以下砂粒を多く含んでいる。復元口径は12.4cmを測る。西側谷地形埋土の40層より出土した。



第4図 上ヶ谷遺跡出土の土師器・須恵器

16は須恵器の蓋である。復元口径は14.8cmで、天井部から口縁端部に向かって内湾しながら下がり端部は尖り気味である。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒をわずかに含み、調整は回転ナデである。谷地形埋土の40層より出土した。

17は須恵器の杯で、復元口径は12.2cmを測る。受部は上方へのび、たちあがりは短く内傾し、端部は尖っている。焼成は良好で内面は明青灰色、外面は青灰色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒をわずかに含み、調整は回転ナデである。調査区中央部で露呈する地山直上で検出された。

18は須恵器直口壺の口縁部と思われる。復元口径は6.6cmを測り、口縁端部に向けてほぼ垂直にたちあがり、口縁端部付近で先細りし、端部は尖り気味である。焼成は良好で、内面は緑灰色、外面は明青灰色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒をわずかに含む。調査区中央部で検出されたSD02とSX01埋土より出土した。

19は須恵器壺の底部と考えられる。やや高めの高台をもつ底部からゆっくりと内湾しながら胴部に向かう。焼成は良好で、内面は灰色、外面は青灰色を呈する。胎土はやや粗く、1mm以下の砂粒を多く含む。調整は全体的に回転ナデであり、底部に糸切り痕を残す。西側谷地形埋土の43・45層あたりから出土した。

20・21は石錐である。

20はほぼ五角形の河原石と思われる扁平な石の両端を打ち欠いている。やや人型で色調は灰色を呈している。重量は112gを測り、石材は頁岩である^⑨。東側谷地形埋土である第11層より出土した。

21も河原石と思われる扁平な石の両端を打ち欠いてつくられている。色調は灰白色を呈する。重量は28.6gを測り、石材は頁岩である^⑨。東側谷地形埋土の8層より出土した。

22は砥石である。表面に何かを磨いた痕跡が認められ、数条の溝を有する。色調はにぶい橙色、石材は砂岩で^⑩、重量は1020gを測る。東側谷地形埋土上の8層より出土した。

23・24は磨製石斧である。

23は色調が暗緑灰色で全長8.4cm、最大幅4.0cm、断面はレンズ状を呈し、最大厚1.0cm、重量は55.6gを測る。石材は頁岩で^⑪、西側谷地形埋土の48層あたりから出土した。

24は色調が灰色で全長9.6cm、最大幅4.4cm、厚さ1.6cm、重量は135gを測る。石材は頁岩である^⑫。西側谷地形埋土の40層あたりから出土した。

25は砥石である。灰白色を呈し、全長16.0cm、最大幅10.7cm、最大厚5.2cm、重量は750gを測る。石材は砂岩で^⑬、西側谷地形埋土上の45層より出土した。

26は木製品で孔の配置から判断すると、田下駄と考えられる^⑭。長辺の縁に四つないし五つの方形の孔を有し、一部に焼けた痕跡が認められる。全長59.6cm、最大幅9.6cm、厚さは2.0cmを測る。材質はスギで、西側谷地形埋土の45層より出土した。

第IV章　まとめ

数字の上ではさほど大きい調査面積ではなかったが、そこから知り得たデータは決して少ないといえるものではなく、これまでの情報に新たな知見を加えることができた。この得たデータを整理して今回の調査の成果について簡単にまとめておきたいと思う。

当該遺跡は、現地形をみると一つの谷になっているが、もともとは、東側の尾根が調査区中央部に向かって張り出し、二つの谷に分断されていたものと考えられる。層位と出土遺物の関係から判断すると、恐らく、東側の谷については、縄文時代中期末頃に、西側のものは、平安時代頃には完全に埋まってしまい、現在の地形に近い状態になったものと思われる。また、古墳時代後期以降に調査区中央部の比較的安定した地盤の部分に縦柱建物のSB01が築かれたと考えられる。このSB01の柱筋に沿って検出されたSD01とSD02の両溝の性格は判然としないが、建物の方向性や柱の位置など偶然にしてはあまりにも一致しすぎるため、SB01を建てるとき、あるいはSB01の存在期間中に何らかの役割を果たしたものと思われる。SB01とSD01、SD02の関係の詳細については、今後の慎重な検討が必要であろう。

斐川町において縄文土器はこれまでに、結遺跡、武部遺跡、新田畠遺跡、後谷遺跡⁹などの遺跡で確認されている。しかし、今回確認された船元I式などの中期の土器は、斐川町内では初見である。

出雲部での縄文時代中期の遺跡分布をみると、奥山雲の山間部では、頓原町の板屋Ⅲ遺跡、仁多町の下鴨倉遺跡¹⁰、木次町の平田遺跡¹¹、横田町の竜ノ駒遺跡¹²などの遺跡が存在し、また、出雲の平野部では平田市の中猪目洞窟遺跡¹³、松江市の寺ノ脇遺跡¹⁴、的場遺跡¹⁵、タテチョウ遺跡¹⁶、西川津遺跡¹⁷、美保関町のサルガ鼻洞窟遺跡¹⁸などの遺跡があり、瀬戸内地方の同時代中期を代表する船元・里木式の影響を受けた土器が検出されている。

今回の調査で確認された縄文時代中期の上器のなかでも、特に注目すべきものは、遺物番号13の土器である。幸運にも碎片がひとたまりになっていたため、全体の器形がわかる程度にまで復元することができた。キャリバー形の口縁で口縁部に太い沈線文をもち、頸部で口縁部文様帶と胴部文様帶が分かれているなどの中期的な要素が残ることから判断すると磨消縄文が完成する後期初頭の中津式に比べ、磨消縄文としては未完成な段階で、後期には含まれないものと考えられる¹⁹。それゆえ、中津式以前の中期末に位置づけされるものと思われる。

出雲における中期末の土器としては、石見から出雲にかけての日本海沿いの海岸部や隠岐島で確認されているローカル色の強い「波子式」が存在する²⁰。しかし、当該遺跡で検出された土器は「波子式」に属するものではなく、同様に「波子式」の類ではない中期末のものが出土している例はごくわずかで、松江市の才ノ崎遺跡、安来市の石田遺跡で確認されているにすぎない。

今回ここに紹介した資料は、これまであまり内容究明が進まなかった出雲平野の縄文中期という時代の様相を知る手がかりとして貴重な資料になると思われる。今回の調査では残念ながらその時代の遺構を認めるることはできなかったが、恐らくは周辺部に何らかの痕跡が残されていると思われる。今後の周辺部の調査と資料の増加に期待したい。

第V章 上ヶ谷遺跡出土縄文土器の復元

キャラリバー状口縁で沈線文が施された縄文時代中期末頃に位置付けされる上器（遺物番号13）が、谷地形の埋土中に押しつぶされたような状態でひとたまりになって確認された。

谷地形の埋土は全般に水分を多く含んでいたため、これらの土器は検出時にはかなり脆弱化していた。取り上げについては、アクリル系合成樹脂による強化も考えたが、出土した層の土壤には、有機物を多量に含み、上器自体にかなり付着している様子だった。そのため、後の洗浄のことを考慮して、取り上げ時のアクリル系合成樹脂の使用は控えた。

3層程度に重なり合っていた土器を各層ごとにできるだけ配置をくずさず、慎重に取り上げ作業を行った。取り上げ以後の作業は下記のとおり実施した⁹。方法については、必ずしも、最善の策であったとはいえないが、予算的・技術的に出来る限りの処置を施した。

(1) 洗浄

こしの柔らかい刷毛を用いて水洗した。土器が著しく脆弱なため、細部までの洗浄が行き届かなかった部分もあるが、目立たない程度にまで一応の汚れ・砂利・有機物は除去した。

(2) 樹脂含浸

脆弱な土器を硬化させるため、水溶性アクリル樹脂（商品名：バインダー17）の22%溶液に8時間含浸した。

(3) 表面処理

バインダーによる表面の光沢がないように、取り上げ後、すぐに土器表面に残るバインダーを拭き取り、表面を軽く水洗した。

(4) 乾燥

16時間、自然乾燥を施した。

(5) 接合

接合には、セルロース系の接着剤（商品名：セメダインC）、シアノアクリレート系の接着剤（商品名：アロンアルファ）を使用した。

特に、シアノアクリレート系接着剤の使用は、可逆性の点で問題を残すが、接合部が確実な部分で、なおかつ接着面が不安定な部分などについて、復元作業に耐える強度を得るために使用した。

(6) 欠損部補填

補填材としては石膏（歯科用焼石膏）を使用した。検出されなかった底部については復元せずに、残存している最下部までの補填で止めた。

(7) 文様の復元

欠損部の文様復元は周辺の残存率が高い部分で、文様が容易に判断できる確実な部分のみにおいて、復元を施した。

(8) 実測図・カルテの作成

着色前の段階で実測図を作成した。また、復元部分を明確にするため、波状になった口縁部の

波頂部を中心にして五方向から写真撮影した。カルテには、使用した接着剤・着色塗料の種類についても明記した。

(9) 着色

塗料は、水性のものを使用し、同系統の色を着色した。

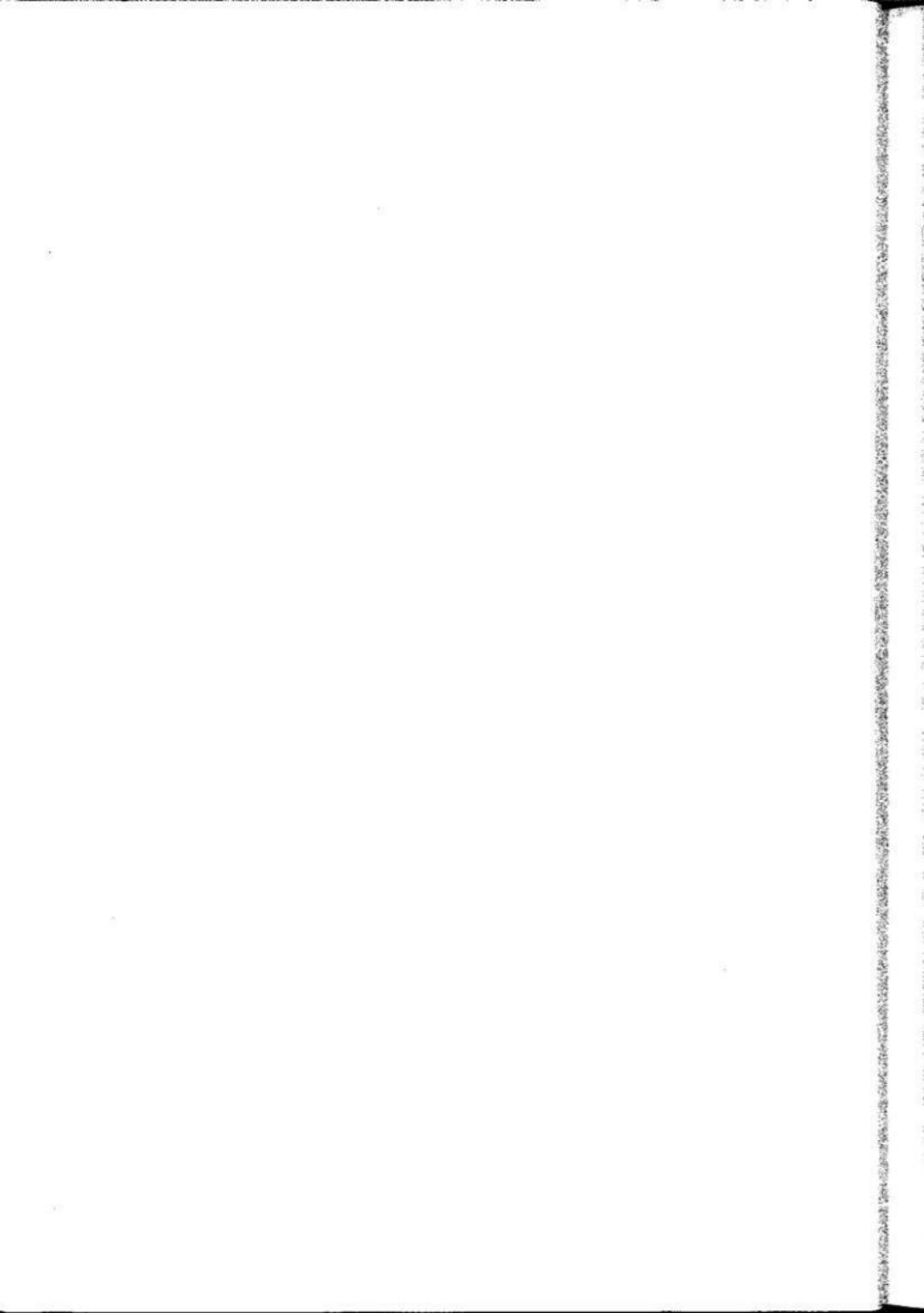
- 註 ① 倉敷考古館『倉敷考古館研究集報 第7号 里木貝塚』1971
② 高橋 譲「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成 第2巻一中期』1981
泉 拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
—北白川追分町縄文遺跡の調査—』1985
戸沢充則『縄文時代研究事典』1994
大川 清・鈴木公雄・工楽善通『日本土器事典』1996
③ 伊藤瑞章氏の御教示による。
④ ③に同じ。
⑤ ③に同じ。
⑥ ③に同じ。
⑦ ③に同じ。
⑧ ③に同じ。
⑨ 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』1993
⑩ 斐川町教育委員会『斐川町文化財調査報告15 後谷V遺跡』1996
⑪ 穴道正年『鳥取県の縄文式土器集成 I』1974
⑫ ⑪に同じ。
⑬ ⑪に同じ。
⑭ ⑪に同じ。
⑮ ⑪に同じ。
⑯ ⑪に同じ。
⑰ 島根県土木部河川課・島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う ケテチョウ遺跡発掘
調査報告書IV』1989
⑱ 島根県土木部河川課・島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う 西川津遺跡発掘調査
報告書V(海崎地区3)』1992
⑲ ⑪に同じ。
⑳ 泉 拓良「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成 第3巻一後期』1981
玉田芳英「中津・福田K II式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期』1989
戸沢充則『縄文時代研究事典』1994
大川 清・鈴木公雄・工楽善通『日本土器事典』1996
㉑ 穴道正年「島根県の縄文土器の研究—縄年を中心として—」『松江考古 第3号』 1980
㉒ 加藤有次「博物館資料の修理と製作」『国学院大学 博物館学紀要 第2輯』1969
伊藤寿朗・森田恒之「博物館概論」1978
青木 登「考古学資料の復元」『博物館技術学 一博物館資料化への考古資料』1985

文化財一覧表

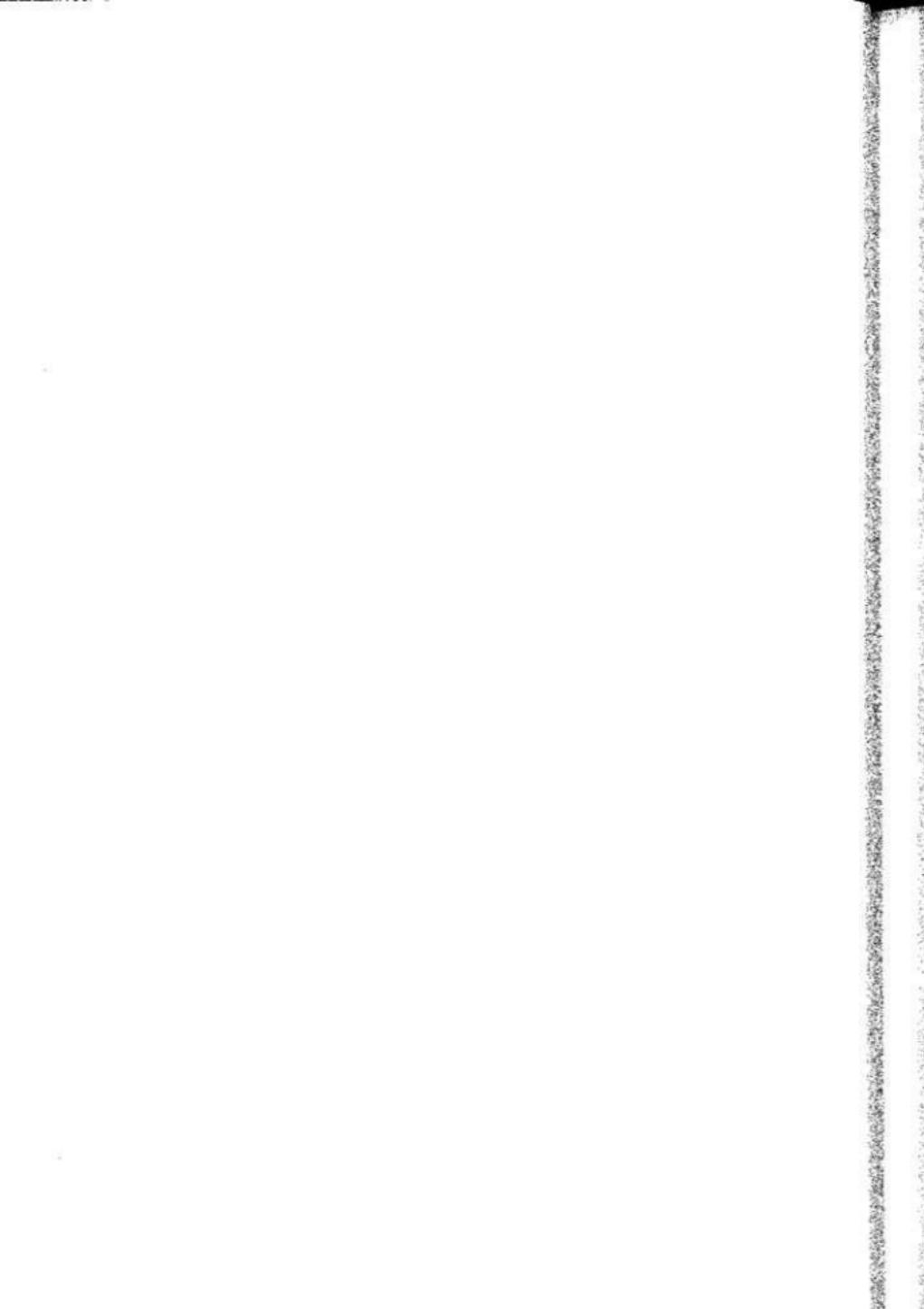
| 遺跡番号 | 名 称 | 遺跡番号 | 名 称 | 遺跡番号 | 名 称 |
|------|-----------|------|-----------|------|-----------|
| 1 | 平野 I 遺跡 | 36 | 上学頭古墳群 | 71 | 石橋古墳群 |
| 2 | 軍原古墳 | 37 | 軍原千人塚古墳 | 72 | 堀切古墳群 |
| 3 | 軍原丘上古墳群 | 38 | 鍛冶屋横穴 | 73 | 堀切 I 遺跡 |
| 4 | 大井城跡 | 39 | 西光院横古墳 | 74 | 堀切 II 遺跡 |
| 5 | 大倉横穴群 | 40 | 武部西古墳群 | 75 | 堀切 III 遺跡 |
| 6 | 小丸子山古墳 | 41 | 結城古墳 | 76 | 新屋敷古墳 |
| 7 | 大井古墳 | 42 | 貴船古墳 | 77 | 新市 I 遺跡 |
| 8 | 神庭岩船山古墳 | 43 | コモゴ山横穴群 | 78 | 新市横穴群 |
| 9 | 神庭古墳群 | 44 | 後谷古墳 | 79 | 斐川公園内古墳群 |
| 10 | 岩野原古墳群 | 45 | 登道古墳 | 80 | 平野 II 遺跡 |
| 11 | 劍山横穴群 | 46 | 稻城横穴 | 81 | 神守古墳群 |
| 12 | 外ヶ市古墳 | 47 | 御射山横穴群 | 82 | 水室 I 遺跡 |
| 13 | 出西小丸古墳群 | 48 | 龜山横穴 | 83 | 水室 II 遺跡 |
| 14 | 岩野原横穴群 | 49 | 後谷東古墳群 | 84 | 神水古墳群 |
| 15 | 稻城古墳群 | 50 | 武部東古墳 | 85 | 神守 I 遺跡 |
| 16 | 山ノ奥横穴群 | 51 | 白塚古墳 | 86 | 和西 I 遺跡 |
| 17 | 海の平横穴群 | 52 | 水越古墳 | 87 | 城山東古墳群 |
| 18 | 八幡宮横横穴 | 53 | 城平山城跡 | 88 | 外ヶ市 I 遺跡 |
| 19 | 岩桶上横穴 | 54 | 城山古墳群 | 89 | 神守 II 遺跡 |
| 20 | 岩海横穴群 | 55 | 平野古墳群 | 90 | 新在古墳 |
| 21 | 岩海古墳 | 56 | 三井古墳 | 91 | 長者原古墳群 |
| 22 | 高野古墳群 | 57 | 結遺跡 | 92 | 上出西 I 遺跡 |
| 23 | 武部遺跡 | 58 | 西光院裏古墳群 | 93 | 上出西 II 遺跡 |
| 24 | 武部西遺跡 | 59 | 結西谷 I 遺跡 | 94 | 剣先横穴群 |
| 25 | 布子谷古墳 | 60 | 結西谷 II 遺跡 | 95 | 後谷横穴群 |
| 26 | 横手古墳 | 61 | 直江石橋 I 遺跡 | 96 | 後谷 I 遺跡 |
| 27 | 下阿宮古墳 | 62 | 結西谷古墳群 | 97 | 後谷 II 遺跡 |
| 28 | 阿宮公民館後古墳 | 63 | 西古墳群 | 98 | 後谷 III 遺跡 |
| 29 | 墓田横穴群 | 64 | 欠ノ元城跡 | 99 | 後谷 IV 遺跡 |
| 30 | 高瀬城跡 | 65 | 湯谷城跡 | 100 | 神水三メ田古墳群 |
| 31 | 狼山城跡 | 66 | 中前古墳 | 101 | 中出西 I 遺跡 |
| 32 | 出西・伊波野一里塚 | 67 | 結本谷 I 遺跡 | 102 | 山ノ奥 I 遺跡 |
| 33 | 沢田横穴群 | 68 | 結本谷 II 遺跡 | 103 | 沢田 I 遺跡 |
| 34 | 出西岩縄跡 | 69 | 西中学校横遺跡 | 104 | 下阿宮 I 遺跡 |
| 35 | 御射山古墳群 | 70 | 本谷遺跡 | 105 | 下阿宮 II 遺跡 |

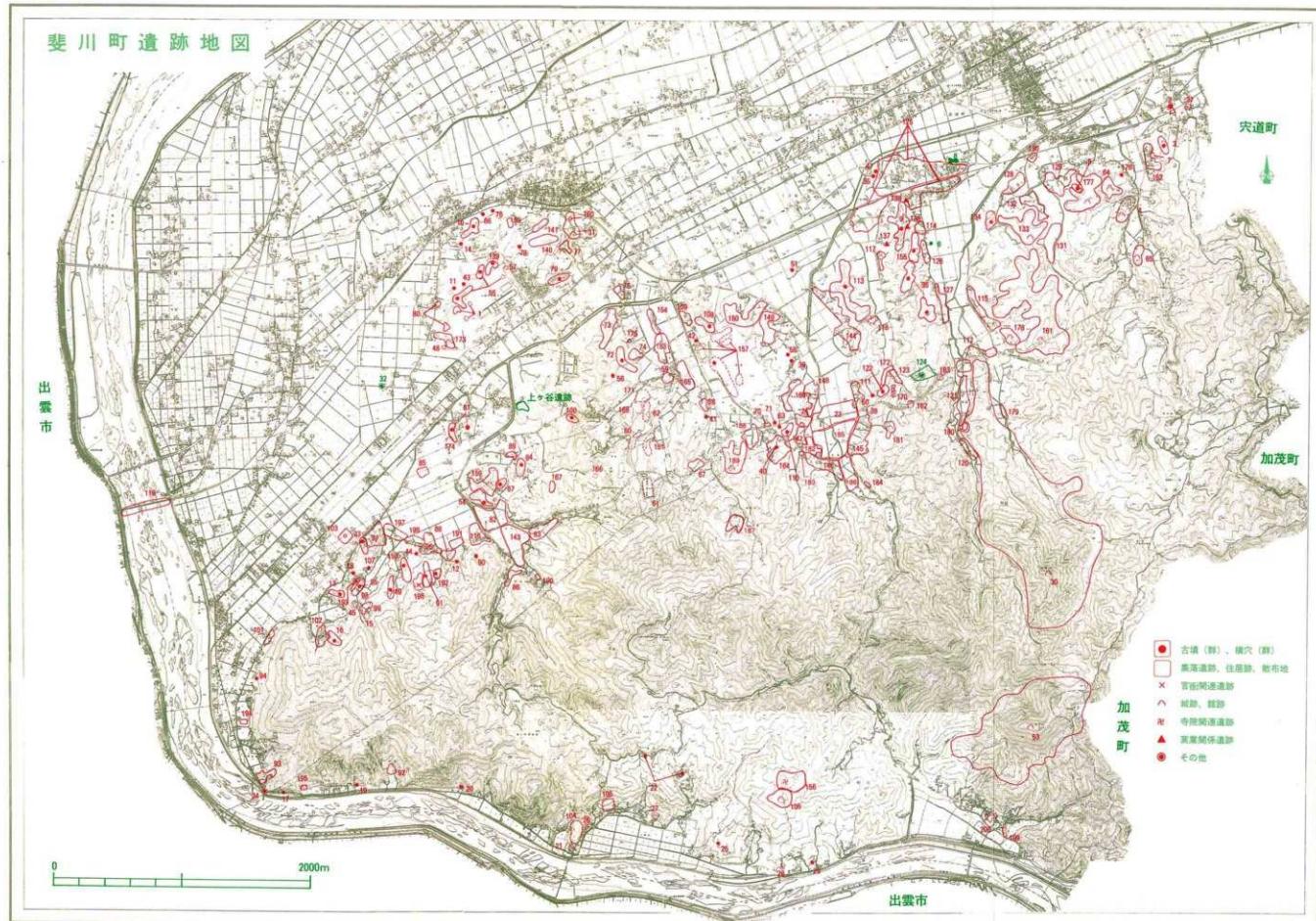
文化財一覧表

| 遺跡番号 | 名 称 | 遺跡番号 | 名 称 | 遺跡番号 | 名 称 |
|------|---------|------|----------|------|------------|
| 106 | 立栗山城跡 | 137 | 岡瓦窯跡 | 172 | 西谷Ⅱ遺跡 |
| 107 | 後谷町道脇古墳 | 138 | 岡田瓦窯跡 | 173 | 亀山城跡 |
| 108 | 吉成古墳群 | 139 | 平野横穴群 | 174 | 神守城跡 |
| 109 | 貴船I遺跡 | 140 | 新市Ⅱ遺跡 | 175 | 堀切瓦出土地 |
| 110 | 古殿古墳群 | 141 | 新市Ⅲ遺跡 | 176 | 欠ノ元1号墳 |
| 111 | 奥古墳 | 142 | 福富遺跡 | 177 | 大倉城跡 |
| 112 | 佐利保谷遺跡 | 143 | 氷室Ⅳ遺跡 | 178 | 宇屋谷城跡 |
| 113 | 神庭西谷古墳群 | 144 | 三絡Ⅰ遺跡 | 179 | 宇屋谷Ⅱ遺跡 |
| 114 | 諏訪神社前遺跡 | 145 | 三絡Ⅱ遺跡 | 180 | 神庭谷Ⅲ遺跡 |
| 115 | 宇屋谷遺跡 | 146 | 三絡Ⅲ遺跡 | 181 | 尾田瀬Ⅱ遺跡 |
| 116 | 氷室Ⅲ遺跡 | 147 | 三絡Ⅳ遺跡 | 182 | 三絡Ⅶ遺跡 |
| 117 | 神庭西谷I遺跡 | 148 | 三絡Ⅴ遺跡 | 183 | 三絡Ⅸ遺跡 |
| 118 | 神庭西谷Ⅱ遺跡 | 149 | 三絡Ⅵ遺跡 | 184 | 奥遺跡 |
| 119 | 斐伊川鉄橋遺跡 | 150 | 三絡Ⅶ遺跡 | 185 | 三絡Ⅹ遺跡 |
| 120 | 神庭谷Ⅰ遺跡 | 151 | 結西谷Ⅲ遺跡 | 186 | 三絡Ⅺ遺跡 |
| 121 | 神庭谷Ⅱ遺跡 | 152 | 軍原Ⅰ遺跡 | 187 | 祇園原遺跡 |
| 122 | 西谷古墳群 | 153 | 八斗蔵Ⅰ遺跡 | 188 | 結本谷Ⅲ遺跡 |
| 123 | 西谷遺跡 | 154 | 八斗蔵Ⅱ遺跡 | 189 | 結城跡 |
| 124 | 荒神谷遺跡 | 155 | 田中古墳群 | 190 | 和西Ⅱ遺跡 |
| 125 | 神庭丘陵北遺跡 | 156 | 天寺平廃寺 | 191 | 小野遺跡 |
| -1 | 御射山地区 | 157 | 三角点古墳 | 192 | 押屋古墳群 |
| -2 | 岡地区 | 158 | 稻城丘陵古墳群 | 193 | 後谷丘陵古墳群 |
| -3 | 中溝地区I | 159 | 城山城跡 | 194 | 中出西Ⅱ遺跡 |
| -4 | 中溝地区II | 160 | 狼山土師器出土地 | 195 | 海の平遺跡 |
| 126 | 上学頭Ⅰ遺跡 | 161 | 鹿の巣城跡 | 196 | 郡家(長者原)推定地 |
| 127 | 上学頭Ⅱ遺跡 | 162 | 尾田瀬遺跡 | 197 | 後谷(V)遺跡 |
| 128 | 大倉Ⅰ遺跡 | 163 | 佐利保谷Ⅱ遺跡 | 198 | 稻城遺跡 |
| 129 | 大倉Ⅱ遺跡 | 164 | 結南遺跡 | 199 | 上阿宮Ⅰ遺跡 |
| 130 | 大倉Ⅲ遺跡 | 165 | 直江石橋Ⅱ遺跡 | 200 | 上阿宮Ⅱ遺跡 |
| 131 | 大倉Ⅳ遺跡 | 166 | 有馬谷遺跡 | | |
| 132 | 綿田原Ⅰ遺跡 | 167 | 有馬谷Ⅱ遺跡 | | |
| 133 | 綿田原城跡 | 168 | 三井Ⅰ遺跡 | | |
| 134 | 綿田原古墳群 | 169 | 門原池遺物散布地 | | |
| 135 | 三分市館跡 | 170 | 西谷池遺物散布地 | | |
| 136 | 寿山窯跡 | 171 | 三斗蔵遺跡 | | |

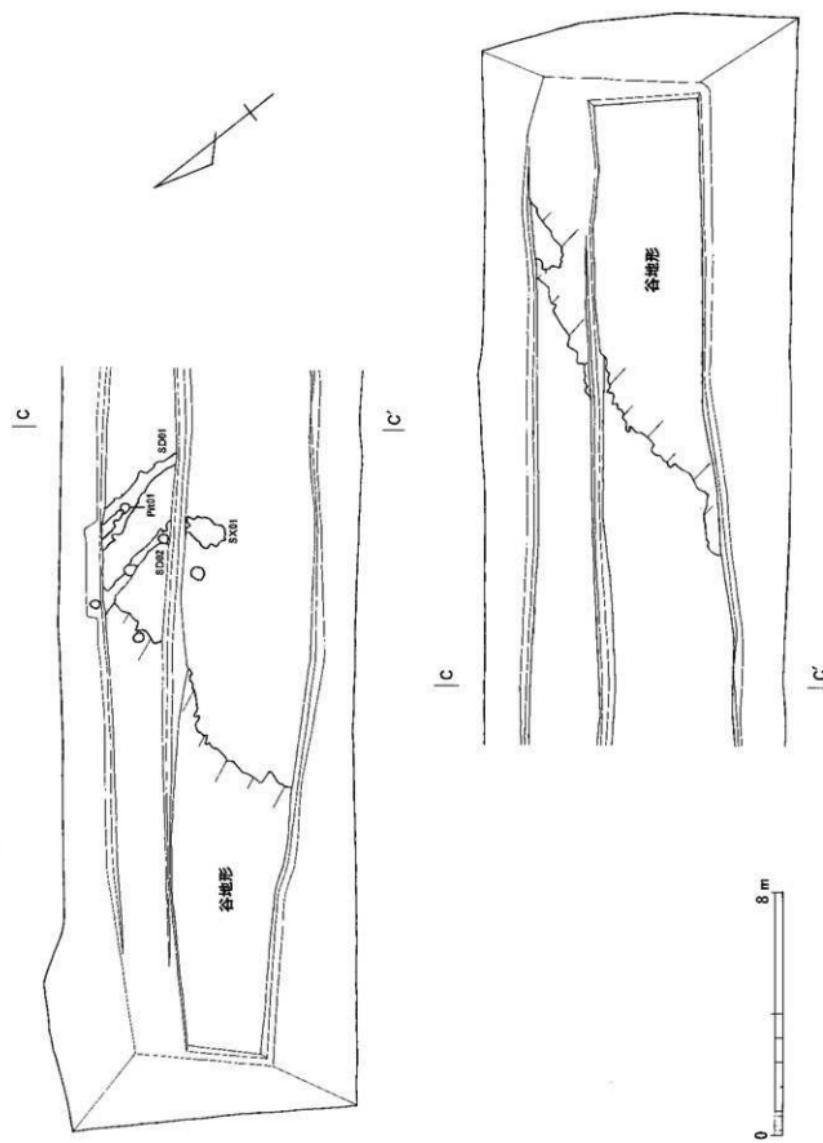


図版

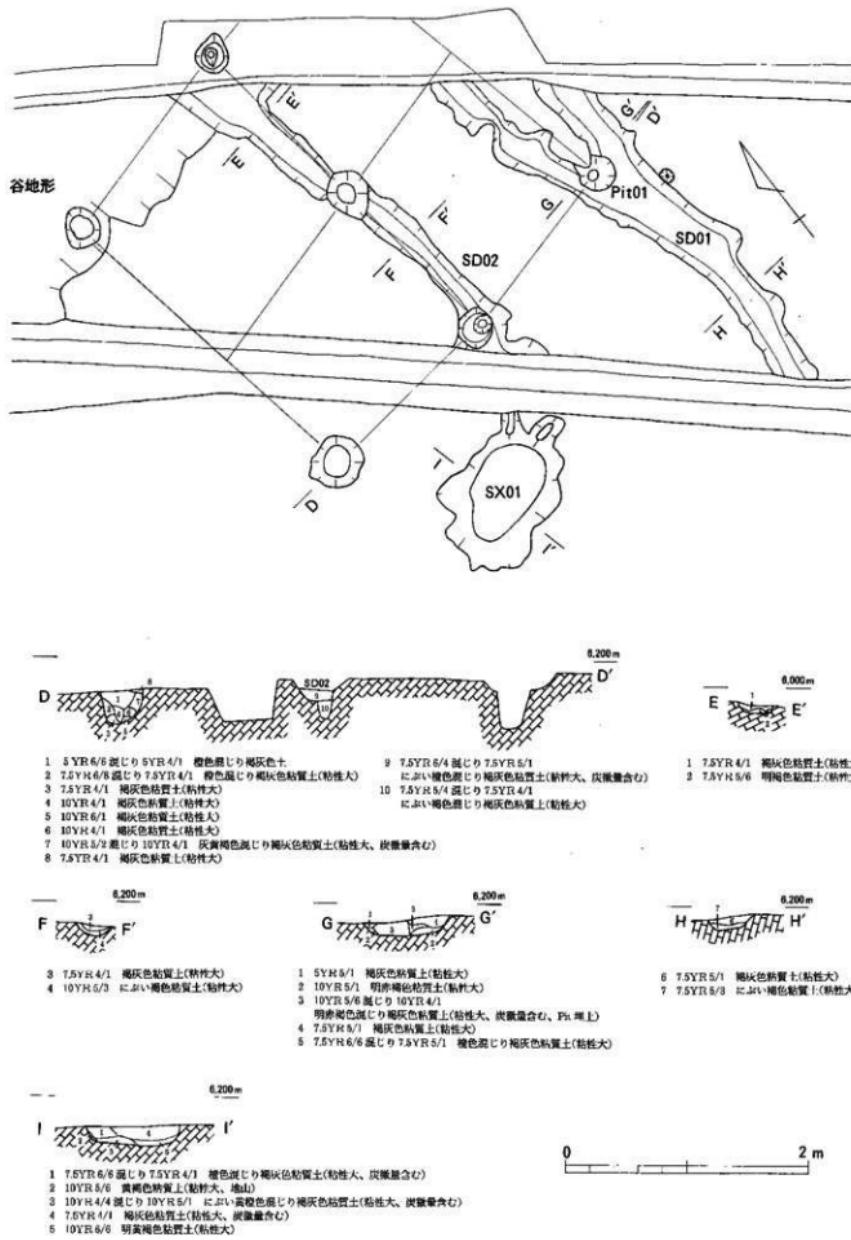




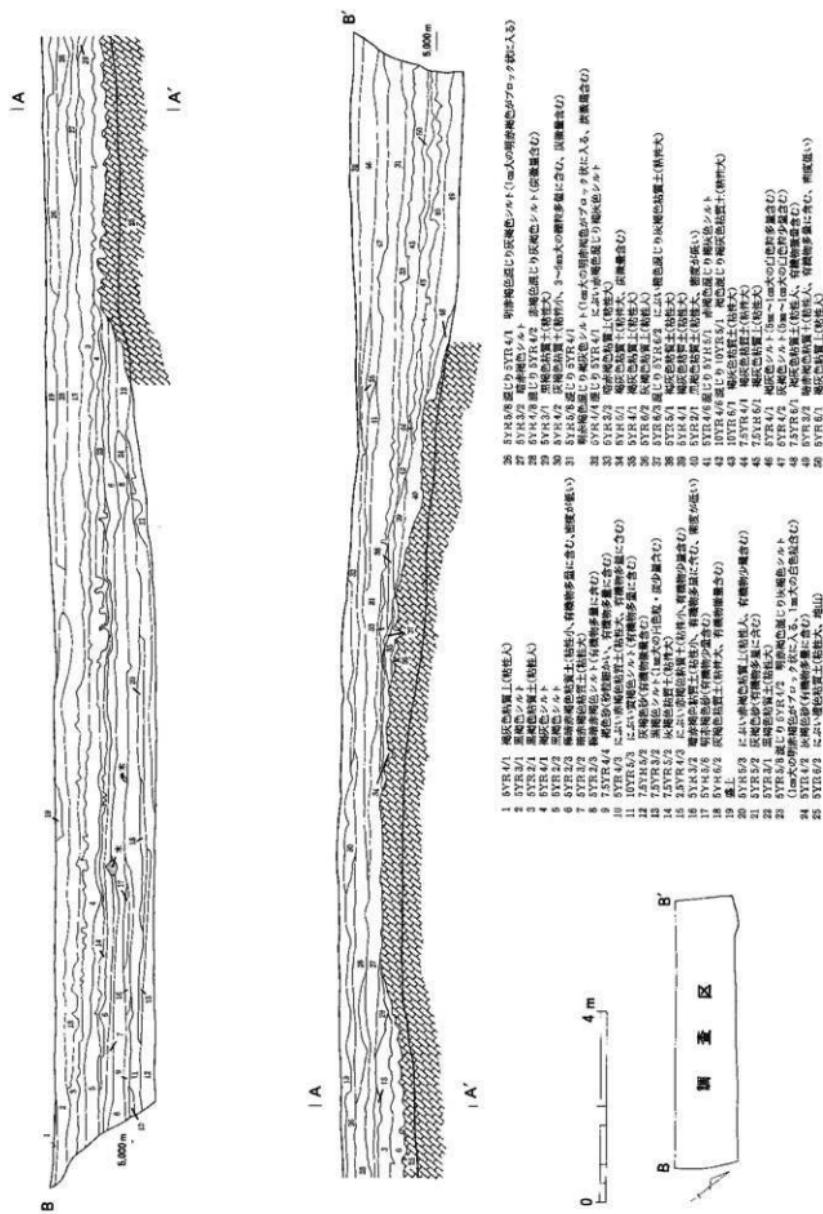
PL. 2 上ヶ谷遺跡調査区平面図



PL. 3 上ヶ谷遺跡遺構平面図及び断面図



PL. 4 上ヶ谷遺跡調査区断面図

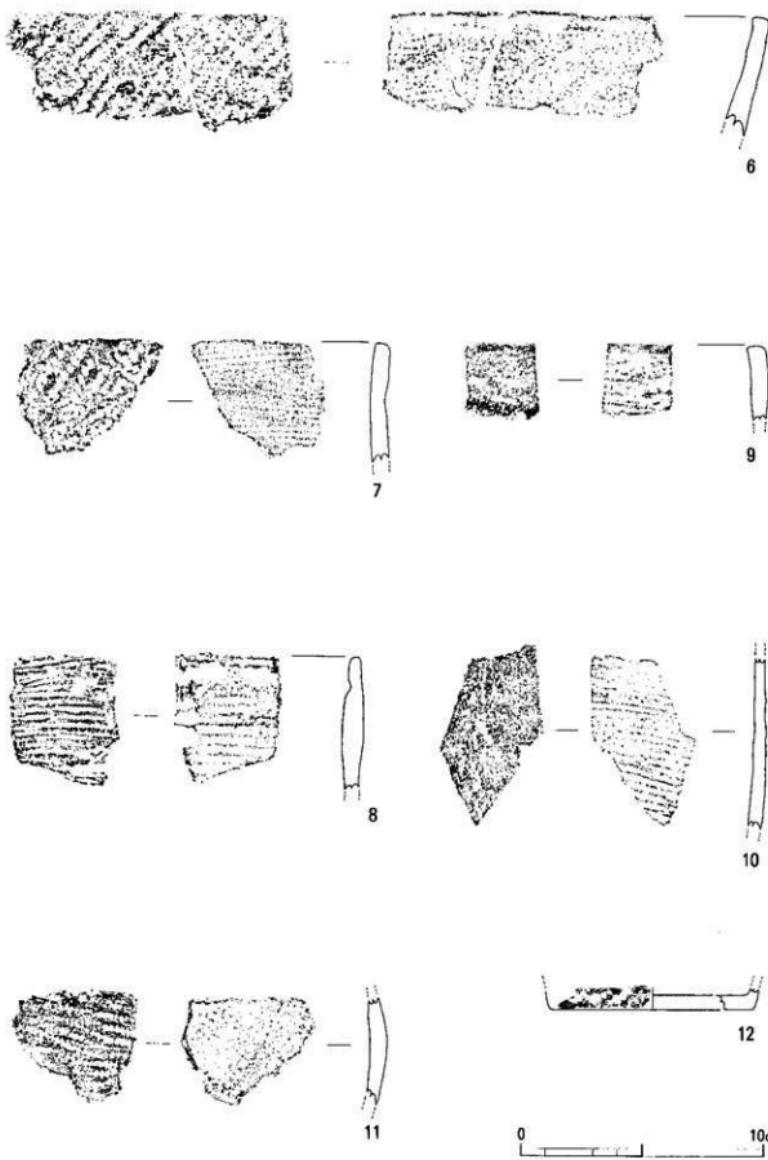


PL. 5 上ヶ谷遺跡出土の土器①

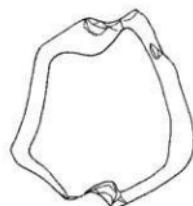
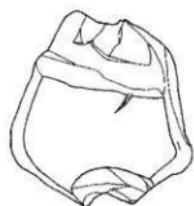


0 10cm

PL. 6 上ヶ谷遺跡出土の土器②

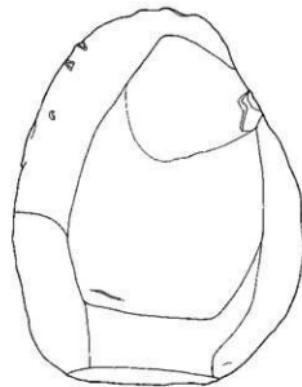
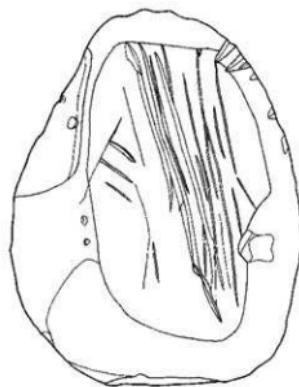


PL. 7 上ヶ谷遺跡出土の石器①

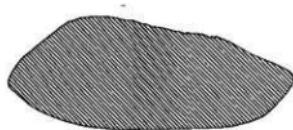


20

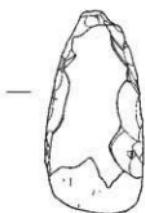
21



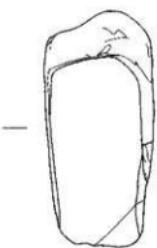
22



0 10cm



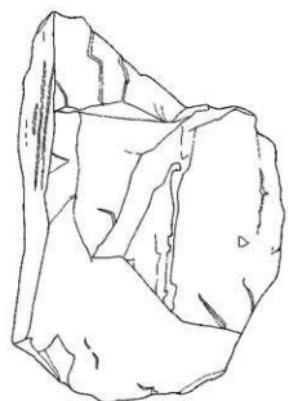
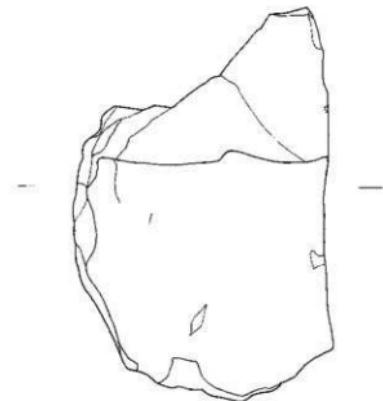
23



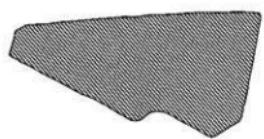
—



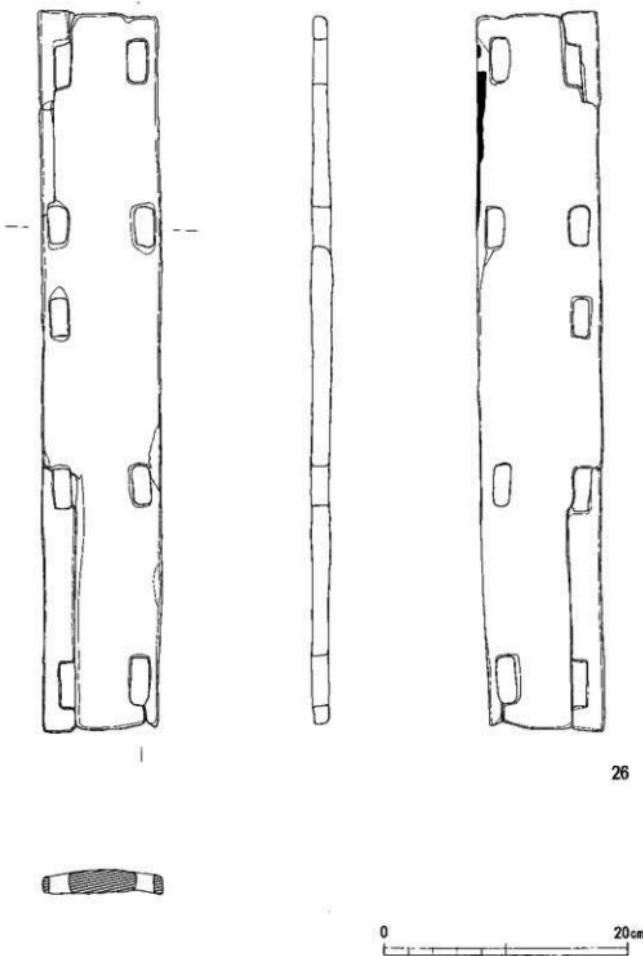
24



25



0 10cm



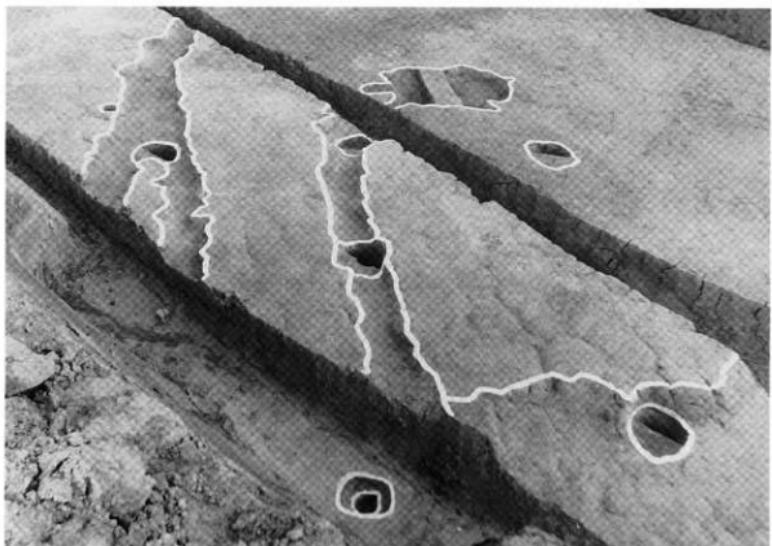


(北西から)



(北西から)

PL. 11 上ヶ谷遺跡調査区 SB01・土層断面

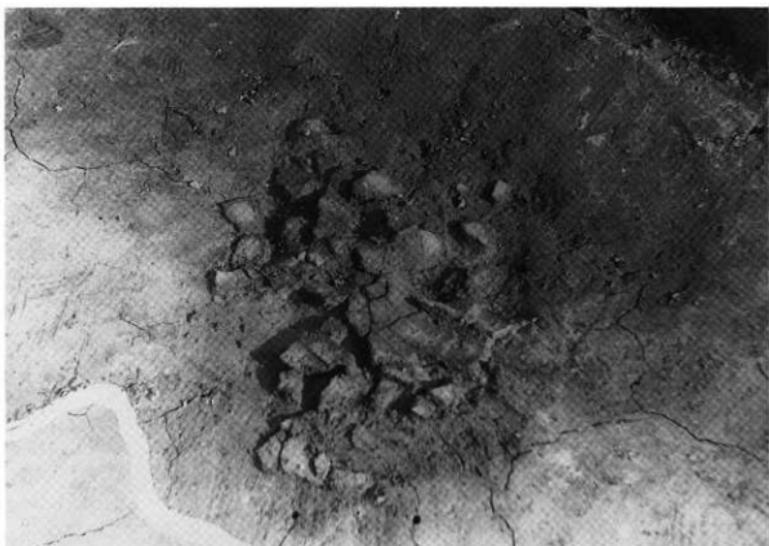


(北から)



(北から)

PL. 12 上ヶ谷遺跡遺物出土状況



(北から)



(北から)





6



7



9



8



10



11



12



14



15



16



17



18



19



20



21



23



22



24



25



26

報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|-------------------------------------|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな | ひらがなひらがなひらがなひらがなひらがなひらがなひらがな | | | | | | |
| 書名 | ふるさと農道緊急整備事業有間農道改良工事に伴う上ヶ谷遺跡発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | <hr/> | | | | | | |
| 卷次 | <hr/> | | | | | | |
| シリーズ名 | 斐川町文化財調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第21集 | | | | | | |
| 編著者名 | 松本堅吾 | | | | | | |
| 編集機関 | 斐川町教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒699-0592 島根県斐川郡斐川町大字莊原町2172番地 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1998年3月31日 | | | | | | |

| 所収遺跡名 | ふりがな 所在 | コード 市町村 遺跡番号 | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|-------|-----------------------------------|--------------------|-------------------|--------------------|-------------------|------------------------|--------|
| | | | 度 | 分 | | | |
| 上ヶ谷遺跡 | しまがん かみがやいせき 島根県斐川郡斐川町 大字神水 | 32401 | 35度 22分 21秒 | 132度 49分 15秒 | 960515~ 960804 | 452m ² | 農道改良工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|-----|-------------|----------------------------|------|------|
| 上ヶ谷遺跡 | 散布地 | 縄文・古墳・奈良・平安 | 縄文土器・土師器・須恵器・石鏡・磨製石斧・田下駄など | | |

ふるさと農道緊急整備事業
有間農道改良工事に伴う

上ヶ谷遺跡発掘調査報告書

1998年

発行 斐川町教育委員会
島根県斐川郡斐川町在原2172

印刷 株式会社 報光社
島根県平田市平田町993